



認知症の方への

生活行為プログラム



広島都市学園大学 リハビリテーション学科 作業療法士 谷川 良博

第7回 認知症の方を取り巻く人的環境について ～本人よりも周囲の人々が変わることが優先～

1. 人的環境の大切さ

読者の皆さんは、認知症の方への支援で、関係する周囲の人々が考え方を变える、あるいは、対応を変えると、本人（認知症の方）の状態が変わった経験はありませんか。人的環境を整えることは、筆者が認知症ケアにおいて最も大切にしている

ので、いつか紹介したいと考えていました。今回と次回は、人的環境（特にかかわる人の心）が変化したことで、認知症の方に変化が起きた例を紹介します。

2. きっかけとなるエピソード

筆者が施設（特別養護老人ホーム）に勤務していた10数年前の話です。施設には、認知症の方が多く入居していました。そのためか、入居者が外出できる機会は年に数回ほどで、一度に何十人も

外出するスタイルでした。

筆者がこの外出方法に疑問を感じるきっかけになった「花見」について紹介します。

それは、花見から始まった

施設は4階建てで、各フロアには25名の入居者が生活していました。毎年4月上旬には花見に出かけるようになっており、フロアごとに日にちが

設定されていました。各フロアのケアスタッフ（以下スタッフ）は、一ヶ月前から準備のため、大忙しです。

職員の奮闘

当日の朝、スタッフは早くから出勤して、入居者の体調の確認や準備物のチェックに走り回っていました。花見には施設のバスで向かいます。入居者がバスに乗り込む際にはスタッフ2人がペアになって介助をします。現地に到着すると、桜の下にブルーシートを敷き、テーブルを設置して、弁当の食事介助をします。さらに、食後はレクリエーションをしたり、散策の介助をして入居者や家族に楽しんでもらいます。そして、14時には帰

路につきます。

施設に到着すると、入居者一人ひとりを居室までお連れして、ベッドで休んでもらいます。ここまで終えて、スタッフはホッと一息つきます。彼らの顔には、皆一様に大仕事をやり遂げた満足感が浮かんでいました。夕方が近づくころ、職員休憩室では「打ち上げを…」「飲み会へ…」の言葉が飛び交い、互いの慰労を目的に居酒屋に繰り出す話で盛り上がっていました。

花見を終えた入居者の様子

一方、入居者は花見から帰った後、どのように過ごしていたのでしょうか。入居者は久しく外に出ていないので、かなり疲れていました。夕食までの2時間、全員が自分の部屋で眠っていたため、そのフロアでは物音ひとつしません。

午後5時10分。夕食のために、入居者は食堂に集います。筆者が数名の入居者に、昼はどこに行ったのか尋ねました。すると、「さて…？」と、

ほとんどの入居者が昼間の出来事を覚えていませんでした。

午後6時。スタッフはビールと酎ハイが待つ街へと出掛け、施設では入居者がいつもと変わらない夜を迎えていました。

筆者は、やるせない気持ちを抱きながら、このアンバランスな状況を眺めていました。

3. 出来事からの変化

ある日、上記の状況を変えたいと考えているスタッフもいるのだと感じる出来事が起きました。それは、後に始まる「願いかなえ隊プロジェクト」に発展するきっかけにもなりました。

登場人物

スタッフA (22歳、男性)

●施設勤務2年目

入居者Mさん (89歳、女性)

●中等度認知症 ●移動は車イス ●Aが担当している

相談の内容

ある日、Aと筆者が昼食を食べながら会話をしていました。すると、Aは「Mさんが『夫の墓参りに行きたい』と何度も口にするのです」と、相談を切り出しました。Mさんは日ごろ口数が少なく、静かに過ごしている方です。そのような方だからこそ、Aは「Mさんの願いを叶えてあげたい」と熱心に語りました。Mさんの夫の墓は、施設か

ら車で20分の距離にあります。往復しても午前中で用件は済むことが分かっていたので、なおさら「連れて行ってあげたい」というAの気持ちは強かったのです。Aの先輩や同僚には、入居者と個別に外出をした経験はなく、家族（息子さん）は近くに住んでいますが、面会は少なく協力を得られそうにありません。誰に相談をしようか悩んだ

挙句、Aは筆者に相談を持ちかけたのでした。

筆者は彼に、「Mさんは車イス介助が必要だね。墓参り当日は職員2名が付き添う必要があるの、私も手伝うよ」と伝えました。そして、「あなたの

上司に相談をしてみても？」と勧めました。介助の人数が確保できたので、Aは意気揚々と上司のもとへ向かいました。

惨敗の理由

Aは10分ほどして戻ってきました。うな垂れ、廊下を歩いて来る彼は、一見して相談が不調に終わった様子が分かりました。Aは筆者の前に来ると、「ダメでした」とため息をつきました。筆者は、結果に驚いて理由を尋ねました。すると、Aは上司から「100人（総入居者数）がそれぞれの希望を持っているの！あなたは100人のやりたいことをすべて聞けるの？」と、厳しい口調で問い詰められたそうです。Aは上司の剣幕に気圧され、「100人の言うことは聞けません」と答えてしまったのです。筆者はその経緯を聞き、Aに再度、許可をもらいに行くよう勧めました。上司を前にしても「時間がかかっても、一人ひとりを大切にします」と言うようにと。しかし、2度目も撃沈されて戻ってきました。



実現した墓参り

それから一ヶ月後、Mさんの墓参りに、Aと筆者の3人で行く日を迎えました。ここにたどり着くまでに、Aは上司から「前例がない」「本人のわがまま」などと言われながら、提示される問題点を筆者と一つひとつ解決していきました。当日のMさんはそんなことは露知らず、嬉々として後部座席に座っていました。夫の墓参りが終わると、

「願いが叶いました」と、我々に手を合わせてくれました。

筆者はせっかく外出をしたのだからと、当初の予定にはなかったレストランでの休憩を加えました。Mさんはケーキセットを食べ、「おいしい、おいしい」と満面の笑顔でした。その笑顔をAは持参したカメラで撮っていました。

一枚の写真が変えた

翌日、AはMさんが墓参りをしている姿や、ケーキを食べながら笑っている写真をほかのスタッフに見せていました。また、Mさんの部屋にも外出の写真を飾りました。この写真とMさんが明るくなった姿を見た息子さんは「こんな楽しそうな表情を久しぶりに見ました」と、Aと彼の上

司に何度も感謝の言葉を述べました。上司は、あくまで反対の立場をとっていたにもかかわらず、家族にはにこやかに接していました。

墓参り以来、息子さんはMさんを定期的にドライブに連れて行くようになりました。Mさんは周囲の人との交流も増えていきました。

思わぬ連鎖から新企画へ

短時間でも外出したことで、入居者や家族に良い変化をもたらしました。しばらくして筆者は、この経緯を眺めていた別のスタッフからも「実は、

担当の〇〇さんを△△に連れて行ってあげたかったのです」と、相談をされるようになりました。

解説

下線①の「やるせない気持ち」の原因は、スタッフは業務をこなすことに熱心なあまり、本来の援助の意味を取り違えていると考えたからでした。入居者に桜を見てもらいたいというスタッフの気持ちは理解できます。しかし、スタッフは入居者が楽しめていたのか、彼らの表情をしっかりと見ていたのでしょうか。利用者主体の支援が基本なのですが、スタッフ主体になっていることに気付いていないのです。

例えば、認知症を患っているから、「数時間前の

花見を覚えていないのは仕方ない」という理屈は誤っています。下線②に示したように、Mさんは墓参りの後、表情が明るくなりました。それは、墓参りを通して、達成できた満足感や我々に感謝する気持ちが、Mさんの心に残ったのです。誰しも感情を伴った記憶は心に刻まれるのです。そして、彼女の表情の変化は家族やスタッフの心を動かすものになりました。そして、「相手を思いやる」こんな普通の気持ちを取り戻させてくれたのでした。

願いかなえ隊プロジェクトの立ち上げ

Mさんの外出が契機になって、「入居者それぞれの願いを一つずつ叶えよう」と、筆者と数名のスタッフで企画を考えるチームを作りました。スタッフが入居者に、「何かしたい？」と尋ねて回り

ました。すると、温泉に入りたい、おいしい食事（特に肉）を食べたい、酒を飲みに行きたいなど、さまざまな希望が寄せられました。

写真1は、トンカツを食べに行ったNさんの様子です。Nさんは、スタッフの問い掛けに対し、「肉が食べたい」と大きな声で答えたのでした。当日、トンカツ屋さんで筆者が彼のためにビールを頼むと、目を丸くして驚き、そして手を合わせてくれました。久しぶりにビールを飲んだNさんは、酔ってしまいました。



写真1 トンカツを前にご満悦なNさん

写真2は、温泉に入った後、Kさんに筆者がビールを注いでいます。年長者であるKさんに筆者がビールを注がないでいると、舌打ちをされて叱られた後の様子です。



写真2 筆者に舌打ちをした後、満足そうにグラスを持つKさんとビールを注ぐ筆者

写真3は、水族館での様子です。筆者が気に入っている写真の1つです。なぜ、好きなのか。それには次の理由があります。

施設では、地域住民やボランティアによる慰問を受けます。多くの人が施設を出入りすると、施設内が活性化されます。しかし、それだけで良いのでしょうか。冒頭で、入居者は年に数回、それも数時間後には忘れていくくらいの主体性のない外出をしていたことを紹介しました。つまり、慰問も今までの外出も受け身だったのです。

ところが、写真3では入居者が自ら幼児に歩み寄っています。それも「触らせてー」「いくつ？」と話しかけながら近づいています。心の中から（内発的に）、湧き上がってくる気持ちが、体を突き動かしているのです。

そうです。写真3には、筆者が目指した「自分から動く」姿が写し出されています。下線①のやるせなさ

には、入居者がなすがままになっている状況に対する悲しみが含まれていたように思います。外出のスタイルを変えることで、入居者に「内から湧き上がる」気持ちを取り戻してもらいたかったのです。



写真3 子どもを取り囲む入居者の皆さん

4. 継続の難しさ

「願いかなえ隊プロジェクト」は、筆者や有志の一部が退職するなどがあっても細々と続いていました。しかし、立ち上げから3年ほどでなくなってしまいました。大きな原因は、現場の人手不足でした。一部のスタッフは継続しなかったのです

が、一人の入居者に複数のスタッフが付き添うのは困難な状況となったようです。継続には“マインド（心・精神）”を持っていることと、信念をもってやり通す『人』が必要なのです。始めたものを継続する難しさを痛感しました。

5. 願いかなえ隊プロジェクトが残したもの

このプロジェクトの意思は、スタッフとご家族の心の中に残っています。それは「only one」の心です。

これは認知症ケアだけではなく、すべてに通じる“マインド”ではないでしょうか。

profile



広島都市学園大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 谷川 良博

約23年間、認知症の方や介護する家族への支援を中心に、病院、介護施設、デイケアで勤務。
平成25年4月より現職。